

岩国 幕末紀行

長州の東端、知られざる幕末物語

IWAKUNI
BAKUMATSU
KIKOU



IWAKUNI
BAKUMATSU
KIKOU



お問い合わせ・発行元

岩国市産業振興部観光振興課

TEL/0827-29-5116

〒740-8585 山口県岩国市今津町1-14-51

岩国市教育委員会文化財保護課

TEL/0827-41-0452

〒741-0081 山口県岩国市横山2-7-19

参考文献:

岩国市史・美和町史・周東町史・吉川経幹周旋記・
岩国沿革志・岩国人物誌・岩国の文化財

岩国藩主

吉川家と幕末の動乱

後の岩国藩主吉川家は、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いの後、宗家である毛利家より岩国の地を与えられた。しかしながら、吉川家は、江戸幕府から毛利家の家臣としてみられ、岩国藩は正式な藩として認められていなかった。そのため、長府藩、徳山藩、清末藩の三支藩とは区別して扱われ、このことは、様々な場面で課題としてあらわれた。

吉川家とその家臣たちは江戸時代を通じて家格を上げる活動を行ったが、なかなか実現にはいたらず、時には毛利家との関係が微妙な時期もあった。そうした中、幕末に大きな転機が訪れる。

嘉永6年（1853）6月3日、日本の開国を求めるアメリカのペリーが、4隻の軍艦を率いて浦賀（神奈川県横須賀市）に来航。江戸幕府は全国の大々々意見を求めると共に、国内の警備を命じた。こうした時局の変化を受け、

安政3年（1856）9月、岩国藩主吉川経幹は長州藩主毛利敬親に萩へ招かれて親睦を深め、一時疎遠となっていた両家の関係が変化し始める。日米修好通商条約締結や桜田門外の変、幕府と朝廷の和解、航海遠略策から攘夷と、国内の情勢が激変する中、文久3年（1863）2月7日、岩国を訪れた敬親は、岩国藩を他の支藩（長府、徳山、清末）同様に扱うことを伝え、岩国藩は本格的に長州藩とともに活動することになる。

攘夷の期限であった文久3年5月10日、長州藩は下関でアメリカの商船を砲撃。フランス、オランダの軍艦も砲撃した（下関事件）。また、三条実美などの公卿を後ろ盾に、攘夷を天皇が自ら率いることとするために、天皇の大和行幸を進めた。しかし、8月18日、会津藩や薩摩藩、中川宮などの政変により、大和行幸は延期。攘夷を進めていた三条実美など七卿は参

内差し止め、長州藩の堺町御門の警備解任など、攘夷を強く進めていた人々は排除された（八月十八日の政変）。これにより経幹も含めた長州勢は京都を追われ、体制を立て直すために七卿とともに長州藩へ落ち延びた。

元治元年（1864）、長州藩は事態打開のため、福原越後など三家老と諸隊を上京させた。そして7月19日、蛤御門付近で京都守護職松平容保の会津藩や薩摩藩の兵と戦闘になる（禁門の変）。結果、長州藩は敗退。久坂玄瑞などを失い、上京しようとしていた経幹や毛利元徳（敬親の養子で後の長州藩主）などは引き返すことになった。さらに幕府は禁門への発砲を理由に長州藩を朝敵とみなし、朝廷は7月23日、長州征討の勅命を発令。朝敵では攘夷も意味を持たず、また、外国の攻撃を受けている中で長州藩の存続も危ういことから、敬親は経幹へ朝廷、幕府との周旋を依頼。経

幹は広島藩と福岡藩、幕府征長軍総督の前尾張藩主徳川慶勝、参謀の薩摩藩士西郷隆盛との交渉で、幕府に恭順し、武力を使わない決着をつけることで合意した。こうして、禁門の変に参加した三家老の切腹によって第一次長州征討は終結。三家老のうち福原越後は川西の龍護寺（現在の清泰院）で切腹している。その後、元治元年12月15日、高杉晋作が功山寺で拳兵したことから長州藩で内乱がおき、幕府に恭順を示す保守派が一掃された（元治の内乱）。長州藩は、幕府に恭順しながら軍事力を強化する「武備恭順」に方針転換。慶応元年（1865）9月21日、長州藩が軍備を整えていることを理由に、幕府は長州再征を発令。しかし、大義名分がないことで出兵を拒否する藩も出るなど、征長軍の編成は順調に、いかなかった。その間、長州藩は防御を整え、長年衝突していた薩摩藩と薩長同盟を締結。これには土佐藩の坂本龍馬が大きく関わっている。慶応2年（1866）6月7日、幕府軍艦の大島郡砲撃によって各地で幕府征長軍と長州軍の戦闘が開始。戦いは、大島口、芸州口、石州口、小倉口の4箇所を境で戦闘が行われたので四境戦争とも呼ばれる。岩国藩は芸州口で参戦。経幹は最初の総指揮を務め、

長州藩の遊撃隊などと幕府軍を迎え撃ち、玖波、大野においても激戦を繰り広げた。

9月2日、長州藩が有利なまま、宮島で休戦協定が結ばれ、翌年、四境戦争は終わる。

その年、経幹は死去するが、その死は明治2年（1869）まで公表されなかった。

その後、大政奉還、王政復古により、明治時代が始まる。幕府崩壊後の明治元年（1868）、これまでの経幹の働きにより、吉川家は城主格となり、岩国藩は正式な藩へ。そのわずか3年後の明治4年（1871）、廢藩置県により、岩国藩は廢止され岩国県となった。

このように、幕末の動乱は日本の歴史の中で近代の幕開けとして重要な位置を占め、岩国の歴史においても、江戸時代を通じての課題であった家格問題が解決した重要なできごとであった。

第二次長州征討（四境戦争）関係図



(1863~1864年)

1 【吉田松陰防長路惜別の地】

よしだしょういん
ぼうちようじせきつち

【所在地】岩国市小瀬 地図 P14 4 C



松陰は安政の大獄によって江戸に護送される際、小瀬の渡場にて防長路惜別の詩を詠んだ。現地には記念の石碑があり、「夢路にもかへらぬ関を打ち越えて 今日を限りと 渡る小瀬川」。夢でも帰ることができない関戸を越えて、今日が最後と小瀬川を渡る。石碑からは、故郷と決別する松陰の断腸の思いが偲ばれる。

2 【仙鳥館】 せんちようかん

【所在地】岩国市横山3-3-11 地図 P15 3 1 B



始めは仙鳥屋形と称し、元禄11年(1698)吉川広達幼時の居所として建てられ、以降は代々藩主幼時の居所に充てられた。12代藩主経幹、13代藩主経健も仙鳥館で生まれ、幼少時代を過ごした。

3 【藩校養老館跡】 はんこうようろうかんあと

【所在地】岩国市横山3丁目辺り 地図 P15 3 1 B

弘化4年(1847)、吉川経幹により創建、文武併置の学校で、仕事や環境などにより、出勤や入校を考慮され、考試制度を導入していた。幕末の岩国を支えた志士を教育した。慶応2年、火事で建物の大半を焼失。第二次長州征討や藩内の学派の対立、思想の軋轢があつたことで、再建されることなく廃止された。

4 【東林寺】 とうりんじ

【所在地】岩国市美和町法前510 地図 P14 2 1 C



元治元年(1864)の春、吉川経幹が釜ヶ原の魚切を訪れると、天保の大飢饉の影響による農士の惨状を目にし、国境固めの復興策として坂上組の編成及び撫育役場の設置を厳命した。仮役所として法前の東林寺があてられ、撫育役場として機能した。代官にあたる撫育方を命じられた玉乃東平(世履)は、地元

【岩国幕末コラム】 篤姫も渡った錦帯橋

錦帯橋を強行突破

平成20年、NHK大河ドラマで人気を博した「篤姫」。実は彼女も、鹿兒島から江戸への道中、錦帯橋見物を所望したりし。嘉永6年(1853)9月11日の「御用所日記」には、このときのやりとりが記録されている。



▲実際のやりとりが記録された「御用所日記」の一部

【概略】

薩摩藩主島津斉彬の御姫様(篤姫)が、將軍徳川家定に嫁ぐために江戸へ上る途中、岩国の城下町へ回り道をして、ぜひ錦帯橋を見物したいと、使者をつかわしてきた。岩国藩は「橋は破損している部分もあり、御通行はお断りします。船で通って見物することはできません。」と回答した。

しかし篤姫は再び使者を通じて「近年、主人(島津斉彬)が通行した時には許可を出しているでしょう。先例にならって許可を出せないのですか」と尋ねた。役人は藩に相談



▲歌川広重「六十余州名所図会 周防岩国 錦帯橋」岩国徴古館 有名な絵師歌川広重の浮世絵にも描かれている。

くださ」と使者に伝え、とりあえず船で見物してもらおう旨を篤姫に伝えました。結局その後、藩の役所には、「御姫様が橋に押しかけられ、色々お断りしたのですが、御通行されました」との報告が上がってきた。山陽道から外れた場所にもかかわらず、篤姫もわざわざ足を運ぶほど、錦帯橋の美しさは当時の人々に評判だったことがうかがえる。

【天璋院篤姫】 てんしょういんあつひめ

天保6年(1836)12月19日(2月5日)~明治16年(1883)11月20日。薩摩藩島津忠剛の長女として生まれる。嘉永6年(1853)、薩摩藩主島津斉彬の養女となる。安政3年(1856)、近衛忠熙の養女となり、同年11月、第13代將軍徳川家定に嫁ぐ。

第一次長州征討

(1864~1866年)

5

【新港】 しんみなと

所在地「岩国市新港町」 地図P14-4-C

第一次長州征討の際には、西郷隆盛らが来岩して長州藩の処置を会議し、長州を焦土から救い、第二次長州征討の際には、幕府の訊問使である永井主水やそれに随行する形で来岩した新撰組近藤勇らとの交渉の場となるなど、幕末の長州における重要な港であった。



6

【清泰院】 せいたいん

所在地「岩国市川西1-7-13」 地図P15-1-D

第一次長州征討の際、吉川経幹の尽力により、禁門の変の首謀者として三家老に切腹を命じ、四参謀を斬首にするこゝとで長州藩は焦土から逃れた。清泰院は、当時龍護寺と称され、切腹を命じられた家老の一人、福原越後が自刃した場所。境内には贈正四位福原越後君殉難碑がある。



7

【処刑場跡】 しよけいじょうあと

所在地「岩国市美和町秋掛引地峠」 地図P14-2-B

美和町引地峠にある処刑場跡。本郷側には血刀を洗ったと伝えられる池の跡も残っている。江戸時代の庄政の証とも言える処刑場である。第二奇兵隊における倉敷騒動に係わった山代出身者ら6人もこの場所で処刑された。



【岩国幕末コラム】 明治維新真の立役者「吉川経幹」

長州藩存続に奔走

黒船の来航に端を発した幕末の動乱の中、坂本竜馬や西郷隆盛、桂小五郎など、多くの志士が国のために奔走し、明治維新を迎えた。こうした幕末・明治維新を語る上で欠かせないのが、第12代岩国藩主吉川経幹だ。

文政12年(1829)9月3日、第11代岩国藩主吉川経章の子として生まれた経幹は、弘化元年(1844)、16歳で家督を相続し、嘉永元年(1848)に元服、通称を監物と改めた。

元治元年(1864)の禁門の変によつて、幕府に長州征討の勅命が発令され、幕軍を中心に長州への攻撃が決定されようとしていた。

敬親より、朝廷、幕府との周旋を依頼された経幹は、岩国を訪れた西郷隆盛らと対面。三家老の切腹とともに敬親の謝罪状の提出などを条件として攻撃の延期を請う一方で、一意恭順の保守派と、武備恭順の革新派との間で揺れ動く藩論を固め、何よりも三家老の切腹

を急がせた。

そして、三家老の切腹が実行されると、自ら広島へ赴き、征長総督府へ嘆願した結果ついに、征長軍は撤兵。第一次長州征討は終結した。

明治の幕開け

こうした経幹の働きによつて、長州は焦土の危機から救われたのである。

第一次長州征討において征長軍による総攻撃が決定されていたならば、その後の薩長同盟の締結もされず、大政奉還や王政復古も成しえず、明治という時代を迎えることは無かつたであろう。

また、慶応3年(1867)の経幹の死が明治2年(1869)まで公表されることが無かつた

のは、幕末の激動の中、毛利宗家存続のために奔走した経幹の働きから、経幹に吉川家かねてよりの悲願であった城主格となる名誉を与えたかつたという敬親の思いがあつたからかもしれない。



▲第12代岩国藩主 吉川経幹(きかわつねまさ)

第二次長州征討(四境戦争)①

(1865~1866年)

8 【通化寺】 つうけいじ

〔所在地〕岩国市周東町上久原1957 地図P142E
 慶応元年(1865)より、幕軍による征長に備え東境の守りの要として遊撃軍の本陣がおかれた。
 境内には、高杉晋作遊撃軍激励の詩の石碑「高杉晋作詩書」があり、他にも遊撃軍記念碑・遊撃軍招魂碑・遊撃軍陣営遺蹟移管碑などの石碑がある。
 また、雪舟作と伝えられている庭園は、日本の伝統的作庭の歴史を伝える学術資料としても貴重である。



▲高杉晋作遊撃軍激励の詩の石碑

9 【国穂寺】 こくおんじ

〔所在地〕岩国市本郷町宇塚420 地図P141B
 山代神威隊の屯所が置かれた場所。
 高杉晋作の決起によって藩政が武備恭順に変わり、軍備の増強が画策されると長州藩内では諸隊が結成され、慶応2年5月10日、山代においても神官による諸隊が結成される。この部隊は、慶応2年6月、芸州口の戦いで神威隊として出動し参戦。幕軍を退ける活躍をした。



10 【西照寺】 さいしょうじ

〔所在地〕岩国市本郷町本郷1630 地図P1421B
 山代の僧侶による階行団の屯所が置かれた場所。
 慶応2年(1866)5月2日、本郷の西照寺を屯所として、歩兵部隊と大砲部隊からなる階行団が結成された。
 芸州で幕軍と戦闘し、撃退している。



11 【赤祢武人墓所】 あかねたけとぼしよ

〔所在地〕岩国市柱島350 地図P144E
 柱島の西栄寺にある奇兵隊第三代総督赤祢武人墓所。柱島の医師の子として生まれた赤祢武人は、松下村塾で吉田松陰に学び、後に奇兵隊の第三代総督を務める。
 しかし、当時藩政を主導していた俗論派と正義派諸隊の調停を図ったことで二重スパイとして疑われることになる。
 さらに、藩論を武力によって統一した高杉晋作と対立。主戦論からの転換を図った赤祢武人は裏切り者として捕らえられ、山口において処刑された。



▲赤祢武人の墓

12 【籌勝院】 ちゅうしょういん

〔所在地〕岩国市小瀬264 地図P144C
 長州軍は、第二次征長軍からの攻撃に備え、遊撃隊を主力として小瀬村に駐屯させた。籌勝院はその際、遊撃隊の本陣がおかれた場所である。慶応2年(1866)6月14日未明に開戦された芸州口の戦いでは、彦根藩を中心とする征長軍の主力部隊に対し大勝。境内には芸州口の戦いで戦死した遊撃隊士の墓がある。また、和木町安禅寺には、岩国藩の団兵戦翼団隊長の品川清兵衛が主葬者となって建立した、芸州口の戦いで戦死した彦根藩士の墓がある。



▲籌勝院本堂

第二次長州征討(四境戦争)②

(1866~1867年)

13 【三士誠忠の碑】

さんしせいちゅうのひ

〔所在地〕岩国市横山2-18 地図P1531B

岩国三士(栗栖天山・南部五竹・東沢瀉)の活躍を後世に伝えるべく明治25年に建てられた碑。

栗栖天山は同じく三士の東沢瀉とともに必死組(後に精義隊)を組織し、藩風改革運動の先駆をなしたが、隊士の過激な行動の責任を問われ兩名とも柱島に流罪となる。慶応2年、天山は沢瀉を救うための島を脱し同士に所思を訴えるが賛同を得られず自刃する。

また、南部五竹は慶応3年(1867)、東沢瀉を救出し奇兵隊に呼応して尊攘の志を達しようとしたが未だに捕らえられ刑死。東沢瀉は、戊辰戦争における精義隊の活躍が評価され釈放された。



14 【小瀬砲台跡】

おせほうだいあと

〔所在地〕岩国市小瀬 地図P1441C

小瀬川をはさんで、安芸国(広島)との国境地帯となる小瀬には、防御のため、多くの砲台が築かれた。また、岩国へ入る山陽道の関門周辺には、防御のための大きな柵や隠れて射撃するための隠し道なども造られた。



15 【妙覚院】

みょうかくいん

〔所在地〕岩国市岩国4-18-14 地図P1531E

南部五竹が斬首された場所。南部五竹は天保2年(1831)、錦見に生まれる。

東沢瀉、栗栖天山と並び、岩国では三士と称される。同じ尊王攘夷派の沢瀉、天山が柱島に流罪になった時に、沢瀉の救出と奇兵隊への呼応を諮るが未だに捕らえられ、斬首された。



16 【群児招魂碑】

ぐんじしょうこんのひ

〔所在地〕岩国市岩国5-12 地図P1431C

慶応2年(1866)11月18日、第二次長州征討に備え藩の砦が置かれた岩国山の伊勢ヶ岡陣営で行われていた、藩校の8~14歳の少年30人による火攻めの訓練が、突風により山火事に拡大。消火に当たった16人が焼死、または、重症の後に死亡。生き延びた数人も責任を執ろうと切腹を図ったが、説得され思い直した。少年達の献身的な事績を称え建てられた碑。



18 【普濟寺】

ふさいじ

〔所在地〕岩国市錦見1-7-30 地図P1541E

陸軍元帥長谷川好道の父であり幕末においては一隊を組織し維新の勲功者として顕彰された長谷川藤次郎。そして、天下の名橋である錦帯橋を有する岩国に、天下の剣士宇野金太郎ありと称されるほどの剣豪で、養老館の剣術師範を勤めた宇野金太郎。といった幕末の岩国を支えた志士の墓所がある。



17 【福城寺】

ふくじょうじ

〔所在地〕岩国市大山2-7-9 地図P1421D

第二次長州征討の際、藩主夫人や古文書類の避難場所となった。吉川経幹は征長軍を岩国城下で迎え撃つ覚悟であったと言われており、夫人や古文書類を南河内にある福城寺に避難させていることから経幹の覚悟がうかがえる。



19 【城山】

しろやま

〔所在地〕岩国市横山 地図P1531A

第二次長州征討の際、征長軍の大軍が押し寄せて、小瀬川の国境が守りきれず、岩国の城下で戦闘になった時に備えて、城山山頂には陣屋が築かれた。

これは、万一の場合、兵たちが城を枕に決死の覚悟で戦うことになって、一時的に持ちこたえ、長州本藩の援軍を待つ作戦でもあった。



岩国幕末年表

年	月日	できごと
文政12年(1829)	9月3日	吉川経幹生まれる
弘化元年(1844)	1月14日	経幹家督を相続する
弘化4年(1847)	5月	藩校養老館落成
嘉永6年(1853)	6月3日	ペリー浦賀へ来航
安政元年(1854)	3月3日	日米和親条約締結
安政5年(1858)	6月19日	日米修好通商条約締結
安政6年(1859)	5月25日	吉田松陰、江戸護送の際小瀬渡にて防長路惜別の詩を詠む
	10月27日	吉田松陰刑死
文久3年(1863)	2月7日	毛利敬親来岩、岩国藩を支藩と認める旨を約束
	5月10日	馬関戦争
	8月18日	八月十八日の政変
	10月4日	赤祢武人奇兵隊第三代総督となる
	10月19日	高杉晋作来岩
元治元年(1864)	7月19日	禁門の変
	7月23日	幕府に長州征討の勅命が下る
	7月~	経幹、征討猶予のため朝廷、幕府と長州藩の周旋にあたる
	8月5日	四国艦隊下関砲撃
	10月19日	経幹、幕府の密使より、三家老の首級の差出、参謀過激の徒を厳刑に処すること、公卿方を他藩へ移すことを条件に征長猶予を取り次ぐ旨を伝えられる
	11月4日	西郷隆盛ら来岩(1回目)、三家老処置を督促
	11月11日	益田右衛門、国司信濃切腹
	11月12日	福原越後、川西龍護寺(現：清泰院)にて切腹
	11月14日	総督府総攻撃延期を令す
	12月20日	西郷隆盛ら来岩(2回目)
	12月15日	高杉晋作功山寺にて挙兵(元治の内乱)
	12月27日	征長軍総督徳川慶勝、征討諸軍に撤兵を令す
慶応元年(1865)	1月4日	征長軍撤兵(第一次長州征討終結)
	4月12日	幕府諸藩に防長再征の命を發す
	9月21日	朝廷幕府の防長再征を許可
慶応2年(1866)	1月21日	薩長提携の約を締結(薩長同盟)
	1月25日	赤祢武人山口にて処刑
	5月10日	第二奇兵隊山代出身者ら6人、美和町引地峠にて処刑
	6月7日	大島郡安下庄へ幕軍攻撃開始
	6月14日	小瀬口、和木口開戦(芸州口の戦い)、岩国藩、長州諸隊とともに要撃
	6月16日	石州口開戦
	6月17日	小倉口開戦
	9月2日	宮島にて休戦協定
	11月18日	伊勢ヶ岡にて火攻め訓練中の少年らが山火事により死傷
慶応3年(1867)	1月23日	幕府解兵の命を布告(第二次長州征討終結)
	3月20日	経幹死去(喪は発せられず)、吉川経健が藩政を摂理する
	10月14日	大政奉還
	12月9日	王政復古の大号令
明治元年(1868)	1月3日	鳥羽・伏見開戦、岩国藩兵征討軍の先頭となり奮戦
	4月11日	江戸城開城
	4月19日	吉川経幹が諸侯に列せられ、岩国藩正式に支藩となる
	6月19日	岩国藩に北越出兵の令下る
	11月15日	錦見城山にて東北戦場犠牲者の祭典を起こす
	12月28日	経健正式に家督を継ぐ
明治2年(1869)	3月20日	経幹の喪を發す
	6月17日	藩籍奉還
	6月26日	経健岩国藩知事となる
明治3年(1870)	2月	諸隊暴動鎮圧のため出兵
明治4年(1871)	7月14日	廃藩置県
	7月27日	岩国県となる
	11月15日	山口・岩国・豊浦・清末の四県を廃し、改めて山口県となる

■ 岩国関連史実

新たな時代 (1868~1871年)



20 【岩国学校】 いわくにがっこう

所在地「岩国市岩国3-1-18(岩国学校教育資料館) 地図 P153IE

明治3年(1870)、岩国藩主(当時は藩知事)吉川経健が学制の大改革を行い、旧兵学校と文学校を公中学・公小学に組織を改めて現在地の近くに新築され、翌4年2月に開校されたもの。

1・2階部分は和風建築、3階部分は明治5年に増築された洋風建築と、和洋を混濁した建築様式は明治初期の教育制度の激しい変革と文明開化の気運を象徴するもので、全国に現存する明治初期の学校建築の中においても様式の特異性において他に例を見ない。

現在、1・2階には様々な教育資料や民俗資料、郷土資料が展示され、岩国藩出身で「日本の電気の父」と称される藤岡市助に関する資料が多数展示されている。

21 【昌明館】 しょうめいかん

所在地「岩国市横山2-1-13(吉川史料館) 地図 P153IB



寛政5年(1793)6月に7代藩主吉川経倫の隠居所として建造された。廃藩置県の際、岩国県庁が置かれ、岩国の政治の拠点となった。現在は、18世紀末頃の建築様式をよく留めた長屋二棟門一棟が残されており、市指定の有形文化財となっている。

22 【東沢瀉関連史跡】 ひがしたくしゃかんれんしせき

所在地「岩国市保津2-1-5・通津 地図 P144IE



東沢瀉は、藩校養老館では南部五竹・大草馨堂と並び三博士と称されたほど学に秀でており、吉田松陰と共に防長王学(陽明学)の二先生と称されている。戊辰戦争後、柱島より釈放された後に開いた塾では郷党の子弟を教育し、詩文書画に親しんだ。現在は近くに記念館が建てられ、終焉の地である通津には記念碑と墓所がある。

錦帯橋周辺マップ



岩国市全域マップ

